霊〇新〇の献身　8
【完】

【完】霊○新○の献身　8

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19805241

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊

最霊です。ですが師匠総受けです。今回で完結となります。良ければどうぞお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

【完】霊〇新〇の献身　8

青年はその山吹の花色をした瞳をゆったりと開いて、目覚めの放送を聞く。
「おはよう、啓示さん」
山吹がほころぶ。
「……ああ」
大悪霊は何処か居心地悪そうに、そう返した。
霊幻は布団をたたみ、囚人服に着替えて朝食を待つ。
所在なさげに立つ最上と目が合うたびに、霊幻はくすっと笑った。
「どうしたんだよ。今日は聞き込みに行かないのか？」
「あー……」
最上は頬をかきながら斜め上を見る。
「その……身体は大丈夫かね？ちょっとばかし……やり過ぎたとは思っていて、」
もごもご、と珍しく最上は口の中で語尾をこもらせた。
さぁっと霊幻の顔に朱がさす。
「啓示さん、ちょっと」
ちょいちょい、と霊幻が手招きすると、最上は素直に近寄った。
「……まだ、啓示さんが入ってる感じがする」
ぼしょりと霊幻が耳打ちすると、ばっと最上は顔を逸らした。
「啓示さん、耳真っ赤」
霊幻が、くっくっと笑う。
「ちょっとこっち向いて？」
「絶っっっっ対に嫌だ」
そうイチャイチャしていると、衛生係が食事を持って来た。
いつも通り食べて。
いつも通り食器を出して。
いつも通り少し衛生係と話をして。

いつもと違って、食事をしてすぐ、霊幻は独房から出る事になった。

（ああ）

他の死刑囚はガチャ、ガチャと独房のドアを鳴らす。
霊幻への弔いとして。

霊幻はふうわりと。
菩薩のように笑って、告解室に向かう。
「何か言い残すことはありませんか」
お坊さんが苦しそうに呟く。
霊幻は微笑んで。
「どうか、私の死に心を痛めないでください」
お坊さんが絶句する。
「〜〜〜〜っ、あなたは、本当は……ッ！」
ゆるく霊幻は首を振る。
「私は死刑囚。確定死刑囚、霊幻新隆です。……それが全てです」
お坊さんがくずおれる。
その慟哭に、霊幻は困ったように微笑んでいた。

そして。

処刑室に、霊幻は刑務官に連れられてゆっくりと進んでいく。
「……私に命乞いをするなら今じゃないかね？」
最上が霊幻に囁く。
（俺は刑を受けなければいけない。モブのために。芹沢のために。
テルくんのために）
霊幻が心の中でそう返して、最上は肩をすくめた。
「まあいい。死後は優しく面倒を見てやるから、安心したまえ」
くっ、と複雑そうな顔で、霊幻は笑いを堪えた。
処刑室の前に、見慣れた坊主頭が立っていた。
「ヨシフさん」
霊幻は驚いた後に、嬉しそうに笑った。
「久しぶりだな。なぁ、モブたちはあれからどうなって──」

「センセ、今なら逃してやれる」
焦った声で、ひそひそとヨシフが耳打ちしてきた。
「頼む、助けてと言ってくれ。死にたく無いと言ってくれ……！」
また霊幻は困ったように微笑んだ。
「秩序の為に、俺の死が必要なんだ。そうだろう？」
「……アンタを愛してるんだ。アンタの死刑執行ボタンは、確実を期すために俺が押す事になっている。頼む、こんな残酷な事を俺にさせないでくれ……！」
「……ごめんな」
霊幻はヨシフの辛さから目を逸らしながら、処刑室に入って行った。

床に描かれた赤い四角の真ん中に立ち、霊幻は真っ白な布で目隠しをされる。

首に縄がかけられた。

「……最後に言い残したことは？」
処刑室の中にヨシフの声が響く。
「モブ、芹沢、テルくん、律くん、ショウくん、ヨシフさん、それに……啓示さん」
口が優しく笑みの形を作る。
「愛してる」
刑務官たちが、辛そうに顔を逸らした。
「センセ……」
ヨシフは唇の端を噛み切る。
つうっと血を流しながら。
ぐっ、と死刑執行ボタンを押し込んだ。

ばかん、と霊幻の足元の床が開いて。

霊幻の首に縄が食い込んだとほぼ同時に。

ぶちん、と縄は切れ。

霊幻は下の階に尻餅をついた。

「あてててて！……えっ」

ぽかん、と刑務官もヨシフもその霊幻の姿を眺めている。
１人最上だけが、手を霊幻にかざして、ふん、と鼻を鳴らした。

現行の司法では、死刑は執行されると、再執行されることは無いということになっている。
つまり縄が切れるようなアクシデントが万が一にでもあると、その死刑囚は釈放されることになるのだ。

そんなアクシデントは起こるはずがない。
そうならないように、縄はまず切れない物を使用されている。

超常的な力でも働かない限り（・・・・・・・・・・・・・・）、縄は切れないのだ。

しかし、現在の司法ではそんな力の存在は認められていない。

つまり。

「霊幻新隆は釈放だ……！」

ヨシフが叫び、刑務官たちがワッと喜びに飛び跳ねた。
「えっ？えっ？」
戸惑う霊幻の目隠しと手首の縄が外される。
「刑は執行された。お前の死刑は行われた。お前はもう自由だ」
「え？」
呆然としたまま、霊幻は独房の方へ向かう。
「先生！」

途中でわっと囚人たちが駆け寄ってくる。
「聞きやした。首の縄が切れたって。やっぱりお天道様は見てるんだ……！！先生が死刑になるなんてそもそも道理が許して無かったんだよ！！」
泣きじゃくるヤクザの幹部の背中を霊幻はヨシヨシと撫でる。
それを面白く無さそうに見ている大悪霊に、
（なるほどな）
と霊幻は目を細める。
お天道様じゃなくて、大悪霊が見ていたのだ。
霊幻新隆という人間を。
そして判断を下した。死ぬにはまだ早い、と。
（困ったダーリンだな）
霊幻は苦笑した。

霊幻はすぐ荷物をまとめて拘置所を出る事になった。
「静岡の自衛隊基地が芹沢克也と花沢輝気、上級悪霊エクボに襲われている。これに影山茂夫も合流したら静岡基地は終わりだ。……アンタなら止められる。そうだろう？」
霊幻は険しい顔をして頷いた。
スポーツカーの覆面パトカーに霊幻は乗り込んでシートベルトをしめる。
ちゃっかり後部座席に最上も座った。
「飛ばすぜ……！！」
スカイラインのサイレンを鳴らしながら、ヨシフは車を蹴散らしながら基地に向かった。

※

「……ここか」
芹沢はビニール傘を振る。
分厚いガラスが割れて、項垂れていた拘束服の青年が立ち上がる。
「ふ──ふふ、アハハハハ！！」
ピン、ピィン、と拘束服の留め具が外れて行く。

ふわり、と青年は宙に浮かび上がって、手を広げる。
「待ってて下さいね、師匠。今――助けにゆきます」
うっそりと微笑む青年に、終わりだ、と研究者が腰を抜かした。
「影山くん。まずは霊幻さんに危害が加えられないよう、徹底的にこの基地を無力化していこう」
「簡単だよ。芹沢さんたちはバリア張ってて」
ブゥウウウン、と電子音を鳴らせて茂夫の周囲に超能力が濃縮されていく。
「……行け」
パウ、と音を立てて光の柱が天井を破壊して一瞬で天を突く。
そこから拡散ミサイルのように光の柱は分かれて、
今、
静岡基地に降り注ごうとしていた。
「モブ！」
その声に、シュン、と光が消える。
「モブ、迎えに来たぞ！芹沢も、エクボも、テルくんも！」
見開いた茂夫の濁った瞳に、見慣れた山吹色がうつる。
「し、しょう？」
「そうだ、俺だ！俺の死刑は執行された。もう俺は自由だ！」
ぶわ、と茂夫の目に涙が溢れる。
「師匠……！！」
宙からまっすぐ懐かしいグレースーツに抱きついて、その勢いに霊幻はよろける。
「おっ、とと。なあ、モブ、帰ろう。相談所に帰ろう。俺たちの、相談所に」
「はいっ……！」
茂夫はしっかと霊幻を抱きしめる。
「もう感動の再開は充分じゃないかね？離れたまえ、影山君」
不機嫌そうに最上が声を掛ける。
「君との契約は果たしたよ。新隆君はもう私のものだ」
ぎり、と茂夫は歯ぎしりをする。
「おい待て何の話だ」
霊幻がじろっと最上を睨む。

「さあて、何の話だろうな？」
最上はうっすら笑って誤魔化した。

※

「もしキミが情け無く私にすがって、命乞いをしていたら私はキミを助けなかったよ」
「キミは高潔であった。最期まで美しく、まさしくキミであった」
「だから私は助けたのだ。それがあるべきだと思った」
「影山君との約束は、まあ、守る気はあるような、無いような、そんなものだったよ」
「ただし、何もかもこれまで通り、ではないぞ。心当たりはあるな？」
「……そうだ。その通りだ。やはりお前は智慧がある。我が、」

「伴侶よ」

※

バチ、と霊幻はアパートで目を覚ました。
「……いやーな予感がするなぁ……」
朝の支度を終えて、霊幻はグレースーツに袖を通し、相談所に向かう。
「おはよう」
ドアを開けると、先に来ていた芹沢、エクボ、駆けつけた茂夫、花沢、トメ、そして……見知らぬ茶髪の軽い感じの男性がいた。
「……啓示さん？」
チャラ男は、ふふ、と真っ黒な眼窩で笑った。
「分かるかね？丁度この死体が落ちていたから、拝借したのだよ。これからよろしく頼むよ、所長」

霊幻は額を抑えて、はーっと長いため息をついた。
「……ウチ経営厳しくて、給料まともに出せないんだけど」
「構わんよ。……別のものを貰う」
近づいて来た最上がさらりと金木犀の香りのする髪をすく。
「じゃあ、まず面接から」
イタズラっぽい顔をして霊幻が言う。
く、と最上は笑った。

「世紀の大悪霊、最上啓示だ。これからよろしく頼む」

完